

村上範致と著述古記録に関する基礎研究Ⅲ

佐久間 永子 鵜飼 尚代

一 はじめに

田原藩士村上範致^{（のりむね）}〔文化五年（一八〇八）—明治五年（一八七二）^{（1）}〕は、下級藩士の出自ながら、幕末の安政六年（一八五九）には、藩の最高の重臣である年寄役（家老）にまで昇進し、新政府後の明治二年には大参事を務めた。この範致が記した記録に「安政乙卯聞見雑録二」「安政丙辰聞見雑記三」「安政四丁巳聞見雑記四」「安政五戊午聞見雑記五」「安政六己未聞見雑記六」「万延元庚申聞見雑録七」「文久元辛酉聞見雑録八」「慶応四丁卯冬聞見録」（以後、本稿では上記八冊を「村上範致聞見雑記」という）がある。この「村上範致聞見雑記」を翻刻し、内容を考察することで、幕末における日本社会の様子や幕末から明治初における範致の役割を明らかにすることを目的として、平成二十八年十月より研究会を発足し、翻刻作業に取り掛かった^{（2）}。

これまで、本論集第2号^{（3）}および第4号^{（4）}において、範致の基礎情報（略歴・人物像）およびその古記録の概要につい

てまとめるとともに、「村上範致聞見雜記」八冊の内「安政乙卯聞見雜録二」から「万延元庚申聞見雜録七」まで六冊の目次項目案を作成し、記載されている情報の内容を示し、範致の関心を寄せた事象について部分的だが明らかにした。

範致は、高島流砲術⁽⁵⁾の免許皆伝により、西洋流砲術の指導者としての地位が確立されており、田原藩においても軍備・海防政策など中心的な役割を担っていたため、範致の軍事的立場を考察する研究は見られる。しかしながら、藩の執政、中央政権への視点など、範致の政治的な見解や思想を考察する研究は多くない⁽⁶⁾。

「村上範致聞見雜記」は、範致が一人として収集した情報を記録した備忘録のようなものである。雑記の書かれた年代が、範致自身全国的に砲術家としての地位を確固たるものとした後、藩政の指揮を執り、新たな時代へ向かって行く時期である。このことを考慮するなら「村上範致聞見雜記」は範致の政治姿勢を明らかにする一資料となると考えられるであろう。

本稿は「村上範致著述古記録に関する基礎研究Ⅱ」⁽⁷⁾に続くものであり、範致の人物像を更に考察するため、範致に多大な影響を与えた三宅友信について、先行研究からその出自・人物像をとりまとめ、範致との関係性について考察すること、「文久元辛酉聞見雜録八」および「慶応四丁卯冬聞見録」の目次項目案を作成することを目的とする。本稿において、「村上範致聞見雜記」の目次項目案は完成することとなる。

以下、「二 三宅氏と三宅友信」「三 友信と範致」「五 おわりに」は佐久間が、「四 目次項目案」は鵜飼が担当執筆した。

二 三宅氏と三宅友信

二一 三宅氏の由来と系譜について

三宅友信（文化三年（一八〇六）—明治十九年（一八八六））は、田原藩八代藩主三宅康友の庶子である⁽⁸⁾。まずは三宅氏の由来と系譜をまとめておく。三宅氏の系譜については、『田原町史 中巻』に、三宅家の菩提寺田原靈巖寺の文書「三宅家先祖由来記（大檀越御先祖由来記）」、「三宅氏由来并系譜」、「御家録写」、「三宅氏御系図之事」、「三宅氏御系譜」の翻刻が掲載されており、「三宅氏御系譜」に続く系図として、「三宅氏御系譜補続」を編集し掲載している⁽⁹⁾。

なお、田原市博物館には、これらの他に「三宅家身上記事」、「三宅家系譜類写」、「続三宅系譜」⁽¹⁰⁾が所蔵されている。三宅氏の遠祖については、『田原町史 中巻』に、「南朝の忠臣児島高德ということになっているが、甚だ根拠に乏しい」⁽¹¹⁾とあり、『寛政重修諸家譜』では、「三宅氏の先祖については、諸説を挙げて後勘に備ふるのみ」⁽¹²⁾と結ばれている。遠祖については、根拠とするものが乏しいと見られることから、本稿においても紹介のみに留めておくこととする。

三宅氏は、永禄元年（一五五八）岡崎に召し出され家康に仕え、この時に家康から「康」の字を拝領し、以来三宅氏は代々康の字を名乗っている⁽¹³⁾。寛文四年（一六六四）に、三州挙母より、田原へ移封となる⁽¹⁴⁾。「三宅氏御系譜」、「三宅氏御系譜補続」および「歴代田原城主一覧表」⁽¹⁵⁾等を参考にし、田原移封後の三宅家の歴代の藩主・当主および、友信の父である八代康友から十二代康保までの系図を以下にまとめた。

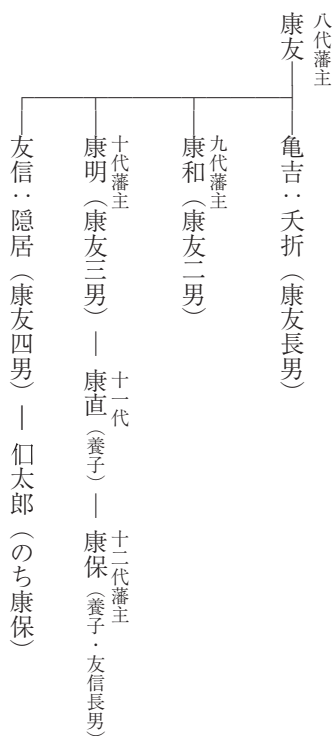
【表1】

代	藩主名	生没年	在位期間	備考
一代	康勝	一六二八―一六八七	寛文四年（二六六四） 貞享四年（二六八七）	
二代	康雄	一六五九―一七二六	貞享四年（二六八七） 享保十一年（二七二六）	康勝の嫡子
三代	康德	一六八三―一七五三	享保十一年（二七二六） 延享二年（二七四五）	康雄の嫡子
四代	康高	一七一〇―一七九一	延享二年（二七四五） 宝暦五年（二七五五）	康德の嫡子
五代	康之	一七二九―一八〇三	宝暦五年（二七五五） 安永九年（二七八〇）	康高養子 豊後国府内藩松平対馬守近貞二男
六代	康武	一七六三―一七八五	安永九年（二七八〇） 天明五年（二七八五）	康之の四男
七代	康邦	一七六四―一七九二	天明五年（二七八五） 寛政四年（二七九二）	康之の五男
八代	康友	一七六四―一八〇九	寛政四年（二七九二） 文化六年（二八〇九）	康高の末男
九代	康和	一七九八―一八二三	文化六年（二八〇九） 文政六年（二八二三）	康友の二男

十代	康明	一八〇〇—一八二七	文政六年（一八二三） 文政十年（一八二七）	康友の三男
十一代	康直	一八一—一八九三	文政十年（一八二七） 嘉永三年（一八五〇）	康明養子 播磨国姫路藩酒井雅楽頭忠実の六男
十二代	康保	一八三一—一八九五	嘉永三年（一八五〇） 明治二年（一八六九） ※版籍奉還	康直養子 友信の長男
三宅家 十六代	康寧	一八五七—一八一八		康保の長男
三宅家 十七代	忠強	一八八三—一九三九		康寧養子 子爵鳥居忠文の二男
三宅家 十八代	直胖	一九〇七—二〇〇四		忠強養子 子爵鍋島直庸の二男
三宅家 十九代	史朗	一九六七—		直胖の孫（直胖の長女啓子の長男）

二二 三宅友信の経歴

友信は、八代藩主康友の庶子として、文化三年江戸麹町の田原藩上屋敷において誕生し、幼名は銅藏、諱を友信。字を子信、号は毅斎、王山、芳春、片鉄⁽¹⁶⁾と称した。



右は友信の前後三代の三宅家系図である。三宅家における友信の立場をよく示している。

九代藩主康和亡き後、康和に世子がなかったため、弟の康明が家督を相続したが、十代藩主康明も世子がないまま文政十年（一八二七）急逝した。それまでの流れから康明の弟である友信が、十一代藩主となるはずであった。しかし『田原町史』によれば、「南朝の忠臣児島高德の後裔である三宅氏の血縁よりも財政崩壊を防ぐことが優先とし、姫路藩酒井家より持参金付の婿養子を迎えることとなったため、友信は二十三歳の若さで隠居となり、江戸巢鴨の田原藩下屋敷に住まうこととなる。この十一代藩主康直擁立に、当時、取次役であった渡辺畢山⁽¹⁷⁾は猛反対をした⁽¹⁸⁾」といわれる。

崋山は隠居した友信の附役に任命され、崋山の影響の下、友信の蘭学研究が始まる。後、友信は蘭書の翻訳を行い、さらに熱心に蘭学研究に取り組むようになり⁽¹⁹⁾、隠居料二千俵余の多くを蘭書の購入に当てている。蘭書の翻訳のため、鈴木春山⁽²⁰⁾、高野長英⁽²¹⁾、小関三英⁽²²⁾らを庸入れることもしている⁽²³⁾。

蘭書についての逸話として、友信が著した「崋山先生略伝」⁽²⁴⁾の中に、佐久間象山⁽²⁵⁾が蘭書の貸借を希望したが、所望する蘭書は持っていない旨答え、象山がむなしく帰って行った話が記されており⁽²⁶⁾、当時、蘭学研究において友信がいかにたよりにされていたかがうかがえる。

二二三 友信の遺物と友信に関する先行研究

友信に特化した研究として、伊奈森太郎『隠れたる先覺者三宅友信』⁽²⁷⁾、伊奈『幕末の勤王儒者 三宅友信伝』⁽²⁸⁾、佐藤堅司『隠れたる兵学者三宅友信』⁽²⁹⁾があり、没後五十年一九三六年には『贈従四位三宅友信公遺墨帖』⁽³⁰⁾が刊行されている。

友信の訳書とされる『西洋人檢夫見日本誌』⁽³¹⁾、『鈴林必携』⁽³²⁾、『泰西兵鑑』⁽³³⁾の詳細が伊奈（一九三六）によって報告されている。また、伊奈（一九三六）は、「在来三宅毅斎の名は儒者として知られてゐた」とあり、「括囊録」五卷、「桂蔭瑣語」三卷、「三河国志」三十卷、「芳春円寓筆」八卷の著書を紹介している⁽³⁴⁾。

『贈従四位三宅友信公遺墨帖』には友信自筆の書画が集められている。友信と言えば蘭学や兵学研究に焦点が当てられるが、藩主一族としての教養も身につけていたことがわかる。

また、友信の直筆として、『蘭書目録 兵書の部』が知られている。文字どおり、友信が所蔵していた蘭書の中でも「兵書」に分類される書籍の一覧である。この中に、

総計 式百拾九冊 参図面

金百七拾八両参分壹朱

総価

外銀四匁六分七厘八毛

外参冊未詳

とある³⁵⁾。この目録に記載された蔵書数は、二一九冊と図面三件ととらえられるが、岩崎克己『三宅友信所蔵蘭文兵書に就いて』³⁶⁾は、これを書名にしたがって調査したところ、八十八部とし、かつ、内容の重複したもの等が十四部あり、実質的に独立した部数六十五部前後であったとしている。「兵書の部」とあることから、医学等その他に分類される書籍も所蔵していたと想像される。

有馬成甫『愛知県田原町現存蘭書及関係文献調査報告』³⁷⁾は、田原町に所蔵されていた蘭書の調査報告書である。その中に、友信が慶応二年（一八六六）に成章館に寄贈した書籍の目録があり、「西洋書籍 原著・訳書 数台一百余种」との記事がある。次いで「右の目録は別紙に添付」と記されており、その別紙の詳細について有馬（一九七〇）には説明がなく、不明のようである。正確な部数の確認は不可能であるが、これらの記録からも友信が多数の洋書を所蔵していたことがわかる。

次に、参考までに友信の略年表を表し、これに崋山、範致の事項を加え、一部分であるが三者の関係を明らかにしたい。年表を作成するにあたり、『田原町史 中巻』³⁸⁾、「御家中系譜惣控」³⁹⁾、『贈従四位三宅友信公遺墨帖』⁴⁰⁾、『日本史年表・地図』⁴¹⁾、『渡辺崋山書簡集』⁴²⁾伊奈（一九三六）⁴³⁾を参考とした。

【表2】

和暦	西暦	年齢	事項	崋山・範致 ※（）年齢	日本政治・外交
文化三年	一八〇六	1	11/27八代藩主康友の庶子として江戸 麹町田原藩上屋敷にて出生。幼名銅蔵 田原へ出立	一八〇四年 ロシア使節レザノフ 長崎に来航	
文政二年	一八一九	14	藩校成章館講主萱生玄順により友信の 名を進命		
文政六年	一八二三	18	江戸屋敷へ出立	一八〇八年 江戸湾沿岸に砲台修 築起工	
文政七年	一八二四	19	崋山の指導により蘭学研究を開始	一八二四年 崋山(32) 家督相続	
文政十年	一八二七	22	7/10藩主康明逝去。姫路侯酒井家より 康直養子に入り藩主となる	一八二七年 崋山(35) 友信に随行し田原出立	一八二五年 異国船打払令
文政十一年	一八二八	23	10/18田原着。藤田郭に居住 友信廃嫡	一八二八年 崋山(36) 友信の附役	一八二八年 シーボルト事件
天保二年	一八三一	26	江戸へ出立、巢鴨に隠居	一八二九年 範致(22) 藩主康直近習	一八三七年 モリソン号漂流を伴 い浦賀へ入港
天保三年	一八三二	27	長子们太郎誕生 長子们太郎康直養子となり世子となる	一八三二年 崋山(40) 年寄末席・海防掛	
天保十年	一八三九	34	「西洋人検夫児日本誌」和訳 小関三英、高野長英、鈴木春山を庸い蘭 書の翻訳開始	一八三九年 崋山(47) 「外国事情」を記す。蜜社 の獄にて投獄	
天保十一年	一八四〇	35	蜜社の獄、友信罪は及ばず	一八四〇年 範致(32) 友信納戸役助	
弘化元年	一八四四	39	崋山の身を守るため田原へ出立 崋山自刃後、江戸へ出立	一八四〇年 崋山(48) 田原へ護送 一八四一年 範致(34) 幕府武州徳丸原における 西洋砲術公開演習に参加 崋山(49) 崋山田原池ノ原屋敷にて 自刃	一八四三年 水野忠邦失脚

嘉永三年 嘉永四年	一八五〇 一八五一	45 46	長子們太郎藩主となり康保と称す 『鈴林必携』初編を著し、上田亮章の名 で刊行	一八五〇年 範致(43) 田原藩軍制を西洋流に改革	一八五三年 米使ペリー浦賀来航
嘉永六年	一八五三	48	『鈴林必携』二編を著し、初編再版と共 に京、大阪、名古屋、江戸の書肆より刊 行	一八五四年 範致(47) 海岸防衛対異国船専門係	一八五五年 長崎海軍伝習所開設
安政三年	一八五六	51	蕃書調所入所 『泰西兵鑑』初編を三宅毅齋著として 刊行	一八五八年 範致(51) 年寄末席	一八五八年 日米修好通商四条約 締結
慶応三年	一八六七	62	田原へ出立、勤王の誠意を表す	一八六七年 範致(60) 同席大名使者として京都 へ出向、將軍慶喜へ上書奉呈	一八五九年 安政の大獄
明治二年	一八六九	64	断髮	一八六九年 範致(62) 藩治職制により一等官執 政、のち大参事	一八六〇年 桜田門外の変
明治十四年 明治十九年 昭和十年	一八八一 一八八六 一九三五	76 81	畢山先生略伝を著す 8/8 東京にて逝去、本浄寺に葬る 12/6 贈従四位に叙せられる	一八七二年 範致(65) 逝去	一八六七年 大政奉還
				一八六八年 明治維新	一八六九年 版籍奉還
				一八七一年 廢藩置県	一八七一年 廢藩置県

三 友信と範致

範致は、文政十年一月三十日、父の隠居により、家督相続、同年十一月六日に友信の近習となり⁽⁴⁴⁾、ここから両者の関係が始まったと考えられる。文政十二年に康直の近習となり、友信の元を離れるが、天保十年二月二十九日に、友信の納戸役が少なかったため、納戸助を申し付けられる。一旦、御免となるが再び納戸助となり、同年五月二十五日には

再び御役御免となる⁽⁴⁵⁾。小刻みな異動に不自然さを感じるが、この間の事情は未詳である。

範致は、年寄（家老）を拝命し、江戸住まいとなるまで、複数回にわたり江戸詰めの命を受けている。この間にも友信との交流があったのではないかと考えられる。

その一つの例として、春山から範致への書簡の中で、友信の元にあると思われる蘭書を江川県令が拝借したいと言ってきたと伝えており、春山はその依頼をまずは範致にしている。このことから、友信と範致の親密さがわかるであろう⁽⁴⁶⁾。

また、友信が著した『泰西兵鑑 二編』⁽⁴⁷⁾の写本が現存するが、その奥付に次のように記されている。

安政六巳未歳孟春写於東都星岡邸

三州田原

孤松軒清谷村上範致秘藏

細図四帖附

範致が「東都星岡邸」で写したものであり、「孤松軒清谷村上範致秘藏」から特別な蔵書であったことがわかる⁽⁴⁸⁾。因みに「安政六巳未歳孟春」とあるが、範致は安政五年六月に年寄末席となっており、すでに藩政の中核で活躍していた。忙しい範致が江戸で、貴重な時間を割いて友信の著作を写していたのである。

以上数例ではあるが、蘭書をめぐる繋がりが友信と範致の間にあり、範致の蘭学研究、特に兵法研究を背後から支えたのが友信であったと言えるであろう。

四 目次項目案

「村上範致聞見雜記」の内容を概観するため、鵜飼・佐久間（二〇一八）および佐久間・鵜飼（二〇一九）で、目次項目をあげ一覽とした。本稿では、その続きとなる「文久元辛酉聞見雜録八」と「慶応四丁卯冬聞見録」の目次項目案を掲載する。「目次項目」は以下の凡例に従って作成した。

〔凡例〕

- 一 「村上範致聞見雜記」に見出しが付されている場合は、その見出しを□で囲い、番号を伏さず用いる。
- 一 他者の「咄」、「風聞」「噂」などについては、同時に得た情報であっても情報ごとに目次項目に加える。
- 一 項目の語としては、「村上範致聞見雜記」中の語をできる限り用い、長くなりすぎないようにまとめる。
- 一 漢字は常用漢字を用い、現代仮名遣いで表記するが、送り仮名についてはできるだけ原文に従う。
- 一 目次項目の上に、項目作成者が便宜的に各冊通し番号を付す。

目次項目一覽

文久元辛酉聞見雜録八

万延二辛酉載新聞風説記

1 墨夷キウスケン殺害を幕府隠す

- | | |
|---|-----------------------|
| 2 | 会津侯供廻りと火事場見廻りの喧嘩 |
| 3 | 旗本二男三男夷人警衛仰付 |
| 4 | 和宮降嫁をめぐる噂 |
| 5 | 英夷支那の対応に追われるか |
| 6 | 蘭館へ盗賊 |
| 7 | 夷人より、幕府による警衛附添い断りの申し出 |

8 桑の皮からの綿糸製成法を夷人伝う
 9 井伊直弼の石碑に異変
 10 横浜の出入り厳制、仏郎西館前の武家通行は危険
 〔酉正月〕
 11 尚又英船二艘品川入津につき警固
 12 横浜へ英船三十艘来る
 13 水府人出奔、幕府横浜夷人館へ夷人の引取り申達
 14 久世閣老は賄賂頻りに受取り
 15 諸侯隠し供多数召連れる
 16 町奉行へ下々不服
 17 仏蘭西人警衛の強化を閣老に申上
 18 水府浪人を預かる諸侯の難渋
 19 幕府より風説聞と号する官出来
 20 上州大嶋村近辺百姓一揆
 21 夷人共多数の附添人と都府徘徊、自身番所へ触れ
 22 横浜夷人との折合い、町内商人の不服
 23 諸侯臨時の物入り多く難渋
 24 見附警衛の任逃れで嘆願や賄賂横行
 25 触面写

26 下野国で剛盜押込み
 27 自身番所や見附の警固嚴重化
 28 浅草藏前和泉屋へ剛盜数十人押入る
 29 土方侯上屋敷へ賊盜押入る〔範致のコメント〕
 30 水府浪人に仮託し、幕下の二男三男等が乱暴
 31 麹町で町人体の男が旗本の家臣に切殺さる
 32 水戸領賊徒退治を元年寄武田彦九郎に仰付
 33 隈本侯老臣長岡監物剛傑組を召連れ出府
 34 出羽国湯殿山の深雪溶解
 35 常陸国橋谷宿で水戸郷士二人を召捕る
 36 下総国佐原村で浪人乱妨、金八百両押借り〔致私あり〕
 37 下総国藤懸陣屋より水戸浪人武器用意を申し来る
 38 薩州蒸気船六艘出来、二艘品川へ入津
 39 町奉行より町役人へ外国人殺害、盜賊に関し御諭
 40 深川・浅草の商家へ水戸浪人という夜盜押入る
 41 以前和泉屋に押入った盜賊は水戸浪人ではなし
 42 桜田騒動で立去りの水府浪人を召捕り、諸侯にお預け

43 四ツ谷大木戸に首なき死体、生首を質草に金押借り

〔致曰あり〕

44 近村で乱妨の水戸郷士二人召捕り

45 悪党対策で常州府中へ警衛の人数御加え

46 常州麻生が賊徒の拠点になる危険あり

47 麻布伊達侯屋敷へ偽水戸浪人忍び入る

48 精鉄四文銭吹立て

49 江戸で落し文や張札が横行

50 水府浪人召捕りに中納言様出馬

51 高輪で異人が細川藩士に無礼

52 秋田安房守屋敷へも剛盜

53 伊藤修理大夫宅での剛盜殺人は極密

54 新板ちよほくれぶし

55 常州で賊徒増殖、時に公辺捕方も敗軍散乱

56 松平播磨侯も常州へ下る

57 南京人が切殺される

風聞書

58 麻生より士分の者水戸領冠者斎・永憐寺へ引払い

59 水戸公公子九郎丸賊塞に趣き説篤

60 彦根公首を持ち出奔した岡部孫次郎を召捕る

61 京都より下向

62 文久と改元

63 堀織部正中小姓アメリカ人キウケイを殺害

64 薩州、英国より買上げの蒸気船見学

65 桑の木より綿取りにつき赤坂市兵衛の活躍

66 水戸浪人寺入り

67 御救米出る

68 和宮下向はいづ

風説

69 横浜越前屋藤左衛門から申上

70 異国役人、日本を柔弱の国と見込む

71 日本の金銀は大方堀尽す

72 日本の金銀残らず外国へ奪取らる

73 日本国は一両年中に悉く衰微

74 日本今世には善神なし

75 当時政司の役人、自分の家さえ栄えれば能し

76 切支丹の広がり

77 中納言様家老武田伊豆守が水戸浪士・農兵らを説得

- 78 水府目付方が浪士らを潮来村で召捕り
 79 水府目付方四人がまだ潮来村に逗留
 80 水府に新規に天狗牢出来
 81 仙台・佐倉・稲葉等人数引取り
 82 潮来村残りの浪士の内五人召捕らる
 83 小見川に八州参りあり
 84 小見川領で小姓村浪人三人乱妨
 85 小見川より隠密を水戸城下へ差出す
 86 召捕られた浪士十七人の大将分は別牢へ
 87 太田には居らず
 88 小見川で召捕りの浪士、姓名が書簡と合わず
 万延二酉年二月水府浪人手配方場所実記
 89 水戸浪人共去月十八日下総国佐原村へ七人罷越す
 90 府中辺に浪人式十人ばかり罷在り
 91 当方・佐倉・大森等の人数は漸く引払う
 92 十日より廿三日頃迄は当辺役廻村
 93 久保町増田屋で士三人と婦一人を召捕り
 94 豚屋の亭主の不義騒動

三月廿四日沙汰書

- 95 英・仏等への使節
 96 酔興の士の失態、金子で内済
 97 小大名が大旗本の女隠居も酔興の士から被害、内済
 98 公辺にても五ヶ年の厳しき儉約
 99 隠居勧告及び引籠りの禁止との噂
 四月十三日沙汰書
 100 外国奉行・目付等役人、対州へ出立
 101 天保山へ出張の沙汰なく、外国奉行の大坂暇の沙汰あり
 102 公辺より触あり、品物少しずつ直下げ
 103 水府・江戸の目付方から通行用印鑑を隣領諸侯へ御渡し
 104 諸色物価高直に付き小給の者共へ仰出さる
 105 洋銀を正金に引換えに付き持逃げ
 106 大小目付案内切紙差出す
 107 昨日差出しの願書・伺書へ差図書
 108 文久元酉年箱館奉行へ渡すべき書付
 109 文久元酉四月十五日勘定奉行から達し請書并印鑑
 110 入用莫大、改革を断行すべし

- 111 文久元酉年二月廿五日松浦老岐守より勝手へ差出し
の書付三通
- 112 酉二月水府浪士の自訴
- 113 大坂表へ異国交易港開港
- 114 英国入口海中一円に台場築造
- 115 文久元年五月天文方考
- 116 英吉利人旅宿警固の家来格別の働き
- 117 英国ミニストルアールコックより書翰
- 118 英国人六人長崎より江戸へ、危険を回避しつつ旅
- 119 水戸家老衆への達しを、紀伊守家来に確認させ協力
依頼
- 120 英吉利人への返書
- 121 馬場先門内で上意の士式人召捕り
- 122 半蔵門外に衣類・珊瑚珠等捨てらる
- 123 半蔵門堀に浮死人あり
- 124 六月廿九日老中松平豊前守へ駕籠訴え
- 125 六月廿九日駕籠訴え騒動の真相
- 126 馬場先門から阿州留守居若党という男が久世様屋敷
へ
- 127 老若屋敷を夜通し巡察中、あやしい男と行違う
- 128 外桜田・馬場先・和田倉門の通行を厳しく規制
- 129 善福寺仏郎察人宿寺へ狼藉士十一人入込む
- 130 水戸領取締りのため尾州より人数多数出府
- 131 水戸屋敷では中納言外出毎に家中出奔
- 132 青山善光寺二階階捻切れ碎ける
- 133 六月廿九日駕籠訴えの二件、訴え人二人は無関係
- 134 神奈川より長崎・箱館への海路の測量
- 135 御殿山に各国夷人ミニストル屋敷取建ての沙汰あり
- 136 和田倉門での刃傷沙汰始末〔致按あり〕
- 137 御殿山蛮夷長官屋敷取建て、金川宿の普請等多大な
入用
- 138 濃州・尾州・勢州・東海道筋川々普請御用の人事異
動
- 139 兵庫開港取極まり
- 140 対州御用出役仰付
- 141 出奔した水戸家来の裁許
- 142 水戸へ裁許の知らせ
- 143 本郷の米屋智、舅妻を切殺す

144 対州出張の交替事情

145 御殿山異人館取建て未定

146 呉服橋外料理屋で細川侯藩士刃傷沙汰

147 御坐間役替え

148 時勢狂歌（四首）

149 都々逸ぶし

150 物輪附

151 ころり病で急死の大夥し

152 老中若年寄仰合で頻りに訓練、高嶋門下にも相談あり

153 和宮下向の調べで木曾路諸侯莫大な入用

慶応四丁卯冬聞見録

時情見聞風説覧

1 九条大納言・千種殿の昇進

2 長州勢蒸気船で大坂着

3 長防の勢が摂州六甲山に楯籠もる〔私曰あり〕

4 摂家交替での執政中止〔私曰あり〕

5 京師多人数入込み暴行横行、本多様衆も被害

6 尾州様京地に楠正成の宮の造立を勧む

7 薩州より多人数上京

8 酒井大学頭・植村駿河守、代理を上京させる願書

9 薩芸太守より申立てにつき、達し、伺い、沙汰、愚存等

10 十月十三日二条城へ呼出の藩及び出席者名簿、その趣旨

11 板倉伊賀守直達

12 伊賀守演達書

13 薩小松帯刀申上

14 慶喜より

15 御所より幕府へ

16 御所にて執政に付き沙汰

17 幕府より天朝へ窺いの事と、御所よりの下げ札

18 幕府（慶喜）より朝廷へ

19 伝奏より在京諸侯諸藩士へ達し

20 諸大名留守居中へ

21 御所より伝奏を以て渡された書

- 22 大樹公伺いの八ヶ条、取計り向き伺いの廉々
- 23 御所より諸藩へお尋ねの廉々
- 24 諸藩士見込み書
- 戸田侯御答
- 25 五卿帰洛事
- 26 外国の事
- 27 幕府伺いも朝儀で決定
- 28 藤堂和泉守家来より言上
- 29 備前・細川・越前・肥前、上杉、佐竹、南部、仙台
等大同小異
- 30 松平三河守、稲葉、丹羽、溝口家来は特に見込みなし
- 四藩より
- 31 実美以下脱走人しばらく太宰府に差置き
- 32 外国の義はしばらく幕府に委任
- 御所より
- 33 実美以下脱走人の事
- 34 外国の事
- 35 大樹公伺いの八ヶ条、取計りはしばらく是まで通り
- 36 御所の仰渡しに対する諸藩士の異論
- 37 今以て伝奏による沙汰なし
- 38 重役を残し帰藩した藩主（三名）の届書き
- 39 御所より附け札（八件）
- 40 冬三ヶ月詰警衛の松本兵部大輔病氣
- 41 紀伊中納言所労
- 42 荒増上京の方は無し
- 43 十二月八日禁裏御所仮建場所て諸藩重役等評儀
- 44 英国公使ハリス大坂にて板倉伊賀守に面会希望
- 45 ハリエ、ルから板倉伊賀守への書翰（釈文）
- 46 柳原大納言達し
- 47 柳原大納言達しの趣、拝承奉る
- 48 伝奏日野へ差上げの請け
- 49 板倉へ届
- 50 十二月より参内差留めの方々
- 51 八日参内諸侯翌昼迄詰切り〔別段あり〕
- 52 長防京で不穏な動き
- 53 上様等京より大坂へ、その前後の京の様子
- 54 上様急な京立退きの背景

- 55 会津立退き後の屋敷、公家門内への出入り
 56 加州侯召戻し
 57 薩州・芸州・土州に京取締まり向きお任せ
 58 丸亀衆懇意の訳
 59 早打ち絶え間無し
 60 板倉様・若殿火急の立退き
 十一月十二日夜大坂より出船の事情荒増
 61 夜中枚方辺より淀川筋一円に篝火
 62 暁七半頃伏見に着船
 63 大津大混雑
 64 京都詰め公役方家族寝のまま逃来る
 65 老婆壱人京より大津迄背負い来る
 66 人足共問屋の申す事致さず
 67 継立はむずかし〔私按あり〕
 68 草津でも継立はむずかし
 69 会津様女中等追々草津着
 70 会津退役、京引き払い宥余につき薩州騒ぐ
 71 亀山辺で和宮女官に行逢う
 72 追分にて建部様・姫路様に出逢う
 73 桑名家中婦人方はねまきのまま京退散
 74 吉田より刑部様蒸気船にて上京
 75 松平下総守藩士岡部にて発狂
 76 上りの石川宗十郎様は浜松に、若州様是由井宿に逗留
 77 府中江尻間にて若州様に出逢う
 78 江尻宿にて松平弾正忠三日程逗留
 79 由井蒲原辺にて歩兵隊・公役方等に出逢う
 80 刈谷重役一行上京途上、京の事件で行き先分かる
 81 騎兵隊多人数三嶋宿に逗留
 82 諸家重役上京のところ引返し
 83 沼津泊りにて吉田様京一条に付き慌ただし
 84 会津様家来より承る咄
 85 尾州様骨折り一方ならず
 86 京地三度の暴動
 87 撰家伝奏・議奏等七卿は退役
 88 下坂後の屋敷固め、出立後も大津にて滞留
 89 即刻立退きの遺留物
 90 上様明春蒸気船にて還御

- 91 守護職御免の砌、三万石加増の達しの直後、引払いの沙汰
- 92 洛中今以て諸商売一切無し
- 93 勅碇が薩州から出るか
- 94 一戦なくしてこの状況は治まらず
- 95 武家の臆病流行
- 96 京で弊藩家士と薩州藩士との喧嘩
- 97 大久保長門守萩山中陣屋焼打ち
- 98 品川にて所々出火し混雑
- 99 会藩布告文

五 おわりに

本稿の目的は二点ある。一点は、範致の人物像を更に考察するため、範致に多大な影響を与えた三宅友信について、先行研究からその出自・人物像をとりまとめ、範致との関係性について考察することであり、二点目は「文久元辛酉聞見雑録八」および「慶応四丁卯年聞見録」の目次項目案の作成を行うことである。

友信については、紙面の関係上、人物像と先行研究を主とし、範致との関係性考察は一部に留まった。両名の関係の根本に迫ったとは言えず、更なる調査を進める必要がある。

しかしながら、友信の蘭学研究があつたからこそ西洋流砲術家村上範致が生まれ、友信の実子康保が藩主となる中で年寄役へ昇進したこと、これは友信の推薦があつたからこそと容易に想像できよう。

また、田原市博物館には、友信の書簡が所蔵されており⁽⁴⁹⁾、これらの書簡を調査することで、範致のみならず、藩主の実父として、藩政への関わり方が明らかになることも期待できるのではないだろうか。

範致が、下級藩士から藩の最高位である年寄に登りつめるまでの間、彼の傍には、崑山、友信、春山がおり、政治思想を形成するに多大な影響を与えたであろう。これらを考察することは村上範致の研究に必要不可欠であり、春山個人

についても別にとりまとめ、この四名の關係性を明らかにする事を今後の課題としたい。

「村上範致聞見雜記」の「目次項目案」としては、未作成であった「文久元辛酉聞見雜録八」および「慶応四丁卯年聞見録」の二冊を掲載した。江戸や京都市中の混乱、桜田門外の変以降の水戸藩士らの動向、外国人に関わる騒動、薩摩長州の勢力拡大等々、幕末・明治初年の国内状況を、風聞などを通じて活写していることがわかる。これにて現存する「村上範致聞見雜記」の「目次項目案」は終了し、雜記の概観をつかむことができた。しかしながら、文久二年（一八六二）から慶応三年（一八六七）まで六年間の雜記は田原市博物館に所蔵はなく（正確には村上家からの寄贈書の中になかったのであるが）、幕政が混乱し大政奉還へと向かう状況で、範致がどのような関心を抱いていたかを知る史料の一つが失われていることは、非常に残念である。とにもかくにも「目次項目案」を「目次」ないし「目次項目」とするよう更に検討していきたい。

目次項目案の作成にあたり、「文久元辛酉聞見雜録八」までは、田原市博物館より拝借した「村上範致雜記」翻刻案を参考にした。この場をお借りし同館に衷心より感謝申し上げる。

村上範致古記録研究会では、更に「村上範致聞見雜記」を読み進めつつ、翻刻を順次広く公表したいと考えている。

【注】

- (1) 村上範致（一八〇八—一八七二）幼名を喜之助といい、通称は定平、諱を初め貞輔といい、のちに範致。清谷と号する。のちに家名の財右衛門を襲名する。田原藩を西洋砲術へ改革し、下級藩士から、家老まで昇進した。『田原町史 中巻』（田原町文化財調査会編、田原町教育委員会、一九七五年）一〇七九—一〇八六頁]
- (2) 村上範致古記録研究会。二〇二〇年四月現在、秋元悦子、砂川亨、鵜飼尚代、黒川秀雄、原知里、佐久間永子、関善道、塚原美根子、仁田紀生、林由紀子、福田花子、堀尾裕真、吉川将（五十音順）の十三名で構成され、毎月一回輪読しつつ翻刻を進めている。
- (3) 鵜飼尚代、佐久間永子「村上範致著述古記録に関する基礎研究」（『名古屋外国語大学論集 2号』名古屋外国語大学、二〇一八年）三〇

一三三、四頁

- (4) 佐久間永子 鵜飼尚代「村上範致著述古記録に関する基礎研究Ⅱ」(『名古屋外国語大学論集 4号』名古屋外国語大学、二〇一九年)三〇九—三四〇

- (5) 高島流砲術 高島秋帆(一七九八—一八六八)が長崎の出島の蘭人から西洋砲術を学び、これを高島流砲術と呼んだ。『日本近世人名辞典』竹内誠・深井雅海編、吉川弘文館、二〇〇五年、五四七—五四八頁

- (6) 佐久間・鵜飼(二〇一九) 三三二—三三三頁

- (7) 佐久間・鵜飼(二〇一九)

- (8) 『田原町史 中巻』一一九七頁

- (9) 『田原町史 中巻』一一六三—一二〇五頁

・「三宅家先祖由来記」 三宅家の菩提寺である田原靈巖寺文書。「大檀越御先祖由来記」と見出しがある。

・「三宅氏由来并系譜」 田原市博物館所蔵

・「御家録写」 十一代藩主康直自筆とされる。田原市博物館所蔵

・「三宅氏御系図之事」 表紙に、「弘化三丙午年十一月吉日愚臣市川信詳謹書之」とある。田原市博物館所蔵

・「三宅氏御系譜」 奥付に「弘化二乙巳十月日 市川茂右衛門信詳謹書」とある。田原市博物館所蔵

・「三宅氏御系譜補続」 『田原町史 中巻』一二〇〇頁に、「田原藩日記を基底とし「靈巖寺鬼録」「御近親様方御法号帳」「御先靈様御法号御年回留」、井上奏次郎編「三宅氏姓譜」などを参考として編成した」とある。

- (10) 「三宅家系譜類写」一丁に「旧記之通ヨリ転載」とある。

「三宅家身上記事」 表紙に朱書きで「明治廿三年家族会館ヨリ別紙雛型之通申来候ニ付取調之上五月廿八日差出ス」とある。

「続三宅系譜」 友信から忠強までの系譜。

- (11) 『田原町史 中巻』四六頁の記載は次のとおりである。

「寛永諸家系図伝」によると南朝の忠臣児島高德ということになっている。高德の名は「太平記」以外には出てこないし、その経歴も不明であり、実在性が疑われている。従って、三宅氏の遠祖であることも甚だ根拠に乏しい。

「三宅氏御系図」によると三宅隼人正師貞というが天文十六年(一五四七)九月に織田氏が梅ヶ坪城攻撃の際討死したと記されてる。

このあたりの記録から信ずるに足るものと思われる。

- (12) 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集顧問「三宅氏」〔寛政重修諸家譜 第十六〕、平文社、一九六五年）一一頁

〔寛政重修諸家譜 第十六〕の記事は次のとおりである。

寛永系図に、(中略)すべて其姓をいふもの紛紜たるにより、寛永の譜にしたがひてあらためず。諸説を挙げて後勘に備ふるのみ。

三宅家の遠祖についての調査は、他に、三宅福次郎氏が著した『三宅家系統譜』(一九八九)、『備前 三宅家系統譜』(一九九四)がある。

- (13) 『田原町史 中巻』四六頁、一一八九頁

- (14) 『田原町史 中巻』四六頁、一一九一頁

- (15) 『田原町史・中巻』一一五九―一二二頁

- (16) 『田原町史 中巻』一〇六五頁、一一九七頁

- (17) 渡辺崋山(一七九三―一八四二) 田原藩士・家老。文人画家・蘭学者。江戸田原藩藩邸の長屋に生まれる。名は定静。字は子安または伯登。通称は登。はじめ崋山と号し、のち崋山と改める。海外事情を研究し、その成果を世に出すが、これが幕府の忌むところとなり、天保十年(一八三九)投獄され(蚕社の獄)、田原蟄居となり天保十二年(一八四二)田原で自刃する。『田原町史 中巻』、一〇四二―一〇六四頁〕、『日本近世人名辞典』竹内誠・深井雅海編、吉川弘文館、二〇〇五年、一一四六頁〕

- (18) 『田原町史 中巻』一〇六五―一〇七〇頁

- (19) 『田原町史 中巻』六五二―六五五頁

- (20) 鈴木春山(一八〇一―一八四六) 田原藩医。西洋兵学の研究者。田原藩藩校成章館教授。文政三年(一八二〇)から同六年(一八三三)まで長崎へ留学し西洋医学を学ぶ。訳書に「海上攻守略説」五巻「三兵活法」十巻などがある。崋山との親交が深かった。『田原町史 中巻』一〇八七―一〇九七頁〕

春山の蘭書の翻訳の研究に、佐藤堅司(一九七〇)「鈴木春山の翻譯兵書をあさりて」〔愛知教育 第五六九号〕愛知県教育会、一九三五年)五六―六九頁 がある。

- (21) 高野長英(一八〇四―一八五〇) 江戸時代後期の蘭学者。名は讓、はじめ卿斎と称し、のち長英と改めた。奥州胆沢郡水沢の生まれ。母方の伯父高野玄斎の養子となる。文政八年長崎へ赴きシーボルトの鳴滝塾に入塾する。その後江戸に戻り、町医となり、診療のかたわら生理学の研究に従事し、天保三年『医原枢要』内五冊を著し第一巻を刊行した。この年に崋山と知りえ、崋山の蘭学研究を助ける。『日本近

世人名辞典』、五五二―五三三頁

- (22) 小関三英（一七八七―一八三九）江戸時代後期の蘭学者、医学者。出羽国田川郡鶴岡に生まれる。名は貞義、のち好義と改め、篤斎または鶴州と号す。江戸の吉田長淑についてオランダ医学を学ぶ。文政五年仙台藩医学館講師となり、蘭方科の教導にあたる。天保二年江戸へ出て桂川甫賢の家に寄寓してオランダ医学、蘭字の研究に没頭、翌三年岸和田藩に仕え同藩医となる。天保四年幕命により天文台に出仕、蘭書翻訳方となる。畢山、長英らと尚葉会を結成する。『日本近世人名辞典』、三七〇頁

- (23) 『田原町史 中巻』一〇六七頁

- (24) 三宅友信『華山先生略伝』（華山全集）畢山会、一九一一年 三一四―三二六頁

これは、師と仰いだ畢山の生前について、友信の記憶を基に記したものである。友信の見た畢山像が、別所興二「江戸時代の人の見た畢山像」（三河地域史研究 第十号）一〇―一二頁にまとめられている。

- (25) 佐久間象山（一八一―一八六四）江戸時代後期の思想家。松代藩士。幼名は啓之助、通称は修理、字は初め子迪、のちに子明、象山は号である。天保四年江戸に出て佐藤一斎に師事し朱子学を学ぶ。藩主真田幸貫より海外事情の研究を命じられたこともあり、海防の問題に専念し、「海防八策」を建白。弘化元年黒川良安に就いてオランダ語を学ぶ。嘉永二年江戸木挽町に塾を開き、西洋真伝を標榜して砲術を教えたが、弟子には必ず砲術と儒学を兼修させた。門下に勝海舟、吉田松陰らがいる。『日本近世人名辞典』、四一四―四一五頁

- (26) 『田原町史 中巻』一〇六七―一〇六八頁

- (27) 伊奈森太郎『隠れたる先覺者三宅友信』愛知県教育会、三益社、一九三五年

- (28) 伊奈森太郎『幕末の勤王儒者 三宅友信伝』（伝記 三（二））伝記学会、一九三六年）二二三―二三五頁

- (29) 佐藤堅司『隠れたる兵学者三宅友信』（愛知教育 第五八一号）愛知県教育会、一九三六年）一一―一五頁

- (30) 愛知県教育会『贈從四位三宅友信公遺墨帖』愛知県教育会、川本商店、一九三七年

- (31) 三宅友信訳『西洋人檢夫兒日本誌』一八三二年

- (32) 『鈴林必携』は、初編と二編が刊行された。伊奈（一九三六、三二頁）は、「編著者は田原藩士上田亮章となって居るが恐らく友信の側助であった上田喜作であろう。友信が上田喜作の名を用ひている」とある。

- (33) 伊奈（一九三六、三二頁）では、『泰西兵鑑』の出版が確認されているのは初編のみとした上で、後編に相当するものも既に訳しているが、出版せられているかどうかは不明としている。

(34) 伊奈（一九三六、三四頁）には、「中根肅治氏編慶最以来諸家著述目録にも漢学者の部に掲載し、友信の著として、括囊録五、桂蔭瑣語三、三河国志三十、芳春円萬筆八が挙げられてある。」とある。

(35) 三宅友信編『蘭書目録 兵書の部』照国会、昭和年間

三宅友信編『蘭書目録 兵書の部』出版、年不明

国立国会図書館所蔵のデジタル版より引用した。

(36) 岩崎克己「三宅友信所蔵蘭文兵書に就いて」（『軍事史研究 第六卷第一号』軍事史学会、一九四一年）四一―五八

岩崎は、書籍に付番をし、重複した書名などを指摘している。

(37) 有馬成甫「愛知県田原町現存蘭書及関係文献調査報告」（『蘭学資料研究報告第14号』蘭学資料研究会、一九七三年）一八一―一九三頁
田原町に現存する蘭書について、以下の記事がある。

三宅友信が慶応2年に成章館に寄付した書籍目録が残っている。それには次の如く記してある。

従 大手様成章館に御献備御寄附左の通り

1 資治通鑑 全294巻

1 四庫全書提要 全20秩

1 四書滙参 全40冊

1 明紀事本末 全30冊

1 十子全書 全35冊

外に和漢書籍並西洋書籍 原著
数台一百余种 訳書

右の目録は別紙に添附

1 金 百両 武術稽古料寄附

已 上

慶応2年丙寅7月 「金田正名氏蔵」

以上の如く西洋書籍原著、訳書が多数あったが今はその書名も知ることが出来ないと故老は語っていた。

以上のとおり、目録から友信が西洋書を田原藩藩校であった成章館に寄贈したことは確かであるが、目録と現物の照合はできていないと見られる。

また、「(1)巴江神社所屬蘭書目録」として三十七件の蘭書を紹介している。

- (38) 『田原町史 中巻』一〇六五―一〇六八頁、一一九七頁
- (39) 「御家中系譜惣控」 田原市博物館所蔵
- (40) 『贈從四位三宅友信公遺墨帖』一一―一二頁
- (41) 児玉幸多編集『日本史年表・地図』吉川弘文館、一九九五年
- (42) 別所興一訳注『渡辺崋山書簡集』平凡社東洋文庫878、二〇一六年、四九一―四九四頁
- (43) 伊奈（一九三六）三〇―三二頁
- (44) 「御家中系譜惣控」 田原市博物館所蔵
- (45) 「御家中系譜惣控」 田原市博物館所蔵
- (46) 鵜飼・佐久間前拙稿、三二―二頁
- (47) 『泰西兵鑑 二編』の写本が、豊橋市中央図書館橋良文庫に所蔵されている。本稿注(33)の伊奈（一九三六）が言及した後編が、これに相当すると考えられる。
- (48) 孤松軒も清谷も、範致の号。岩崎鐵志「高島流砲術伝播の研究」―三河田原藩土村上定平を中心に―（『静岡女子短期大学研究紀要 25号』静岡女子短期大学、一九七八年）一頁
- (49) 田原市博物館には、三宅友信の書簡が所蔵されている。